

それぞれの最終楽章

助け合いの町で ④

残された時間を悔いなく生きる。

誰も思うことですが、病に対する考えは、本人と家族で違うことも多い。触れたくないかも知れませんが、死から目を背けずに、みんな話し合うことが大切だと思います。

3世代が住む家の主、徹さんに一昨年春、大腸がんが見つかりました。手術中に腹膜への転移が分かり、一部を残さざるを得ませんでした。

家族の強い希望で、病院の主治医は「大腸がんは全て摘出した」と本人に告げ、取り残したがんがあることは伏せました。「最善の治療を」という家族の言葉に本人も納得し、抗がん剤治療を始めました。

昨年9月、腹部の激しい痛みのため、診療所の外来に。がんが再発した症状です。「年内いっぱいもつかどうか」という状況でした。「1分1秒でも長生きしてほしい。何がなんでも治療を」という息子さん(52)の希望もあり、入院することに。

痛みが落ち着き、いったん退院した10月下旬に訪問診療しました。どうやら本人は再発に気づいているよ

親子のギャップ、悩まされる余命の告知



永源寺診療所長 花戸貴司さん

1970年滋賀県生まれ。自治医科大学卒。大病院勤務などを経て、2000年から現職。著書に『最期も笑顔で』など。16年、へき地の若手医師を顕彰する第3回やぶ医者大賞受賞。

うで、残された時間の長さを私に聞きました。しかし、息子さんの希望もあり、詳しくは伝えられません。

一般論と前置きして、がんは最後の1カ月を切るとつらい症状が出てくる。でも、それまでは畑に行けるし、好きなこともできる。「だから今のうちに」と言う。「そうか」とうれしそうに顔をして「寝込んだら静かに参らして(死なせて)ほしいから、先生頼むわ」と笑って言いました。

しかし、予想以上にがんの進行は早かったのです。11月中旬に、病院の主治医と家族に私も加わり、今後を話し合う会議を予定していました。その数日前、徹さんは急変、息を引き取りました。76歳でした。

息子さんは「こんなに早く亡くなるとは思っていなかった」と肩を落

としていました。病院の主治医から病状と余命を詳しく説明されていても、父の死を具体的に思い浮かべることが、やはり難しかったようです。

ただ、徹さんは入院するまでに、独立し働いているお孫さんに会いにいったり、休日に家族全員がそろったおりに「仲良く暮らせよ」と自分の気持ちを伝えたり、すべきだと思っただことは大方終えていたようです。残された時間で、充実した人生の最終章を過ごしたように思います。

「少しでも長生きしてほしい」と願う家族の目は、病にだけ向けられがち。それでは、本人の気持ちの後回しになってしまいます。病と向き合うだけでなく、その人の心と向き合う。それが、長い時を経た後に「本人は最期まで満足して生きたのだろうか」「ああいう見送り方ではなかったのだろうか」と誰もが後悔しない方法のように思います。

(構成・畑川剛毅) Ⅱ全6回

朝日新聞デジタルの医療サイト「アピタル」で、より詳しくご覧になれます。